4

広間に通されたのは、若い男三人組だった。
ニコニコと如才ない様子なのは、おそらくインタビュアーだろう。それに、キャスケット帽を被ったカメラマン。撮影に用いるらしい、大きな荷物を肩に掛けた大男。
「初めまして、ミスター・メリーウェザー。《愛猫組合》の広報を担当しております、ビンセント・ロスです。お目にかかれて光栄です。この度はグランプリ、おめでとうございます！」
ビンセントと名乗ったインタビュアーは、メリーウェザーに大仰な挨拶をしたあと、「おや」と銀助に目を向ける。
「貴方はひょってして、ミスター・ナツメでは？　ニッポンの三毛猫（キャリコ）を飼っておられる？　なんとも奇遇ですが、お二人はお知り合いで？」
「ええと、その……」
「ん？　ああ、コンテストの会場で意気投合されたわけですか！　いや、我々もあのような催しを開催した甲斐があるというもの。ここだけの話、貴方の三毛猫（キャリコ）を推す審査員も多かったのですよ？
ちなみに、後ろの方々は、お友達ですね？　皆さん、いかにも猫がお好きそうだ。してみると、ミスター・メリーウェザーのこの館は、我々にとって、まさに夢の城ですな！
いや、こうして猫好きの輪が広がるというのは実に喜ばしい！　どうか皆様、今後も我ら《愛猫組合》発展のために、お力添え下さいませ」
これはまたずいぶんと舌の回るインタビュアーだ。こちらはろくに口を開ける間もない。前もってアーサーの「推理」を聞いていなかったとしても、十分身構えさせられる胡散臭さだった。
もっとも、メリーウェザーはその手の追従には慣れているのか、気にも止めない。むしろ、猫の話題に、鷹揚に笑っている。
「宜しい、宜しい。《愛猫組合》については、儂も期待したいところだしな。だからこうして、取材に応じる気になったのだ。とはいえ、主役は猫だ。さて、何から話したものか」
「そうですね。では失礼ながら、日が出ている内にお写真を撮らせて頂いてもよろしいでしょうか？　いまは、猫たちの昼寝にもってこいの晴天ですが、ところどころ雲も出ているようですし」
「ふむ。では……と、いかん。肝心のマンクスが見当たらん。さっきまでそこで食事しておったのだが、あの悪童め、庭にでも遊びに行きよったな。しばし待ちたまえ。使用人に捜させる」

「おや。そういうことでしたらーー」
と、ビンセントは一瞬、背後のカメラマンや大男と目配せを交わす。
「手分けして捜しましょう。私はこのままインタビューを続けさせてもらいますが、被写体がいないなら、後ろの二人はやることがありませんしね。ああ、ご心配なく。二人とも筋金入りの猫好きですから、猫探しなどお手の物です」
ビンセントの台詞を受けて、カメラマンと大男の二人は、その場に機材を置く。気がつけば完全に、場のペースを握られていた。
「……いいのか、アーサー？」
「……」
小声で確認するコナンに、アーサーは返事をしない。いつになく表情を殺して、じっと三人を見つめている。
結局、《愛猫組合》はインタビュアーを残し、他の二人は使用人たちと共に広間を手で行った。
すかさず、
「銀助。僕とコナンも猫探しに加わるよ。君はワガハイと、ここに居るといい」
「ア、アーサー君、私は――」
「マリーもだ。僕らだけでも人手は十分だろう」
アーサーはそう言いつつ、マリーに顔を寄せると、鋭く耳打ちする。
「――銀助と残る方が安全だ。ただし、気は抜くな」
マリーは緊張した面持ちで、眼鏡の位置を直し、頷いた。

＊

アーサーとコナンが、使用人たちを追って広間を出る。
もっとも、彼らが追いかけるのは、使用人でも猫でもなく、《愛猫組合》の二人だ。
廊下を小走りに進みながら、
「やはり『当たり』か？」
「間違いない。しかも『大当たり』だ。広間を出たのは向こうの『誘い』だよ」
「俺たちを？　こっちのことを知ってるのか？」
「それも、かなり詳しく。あのカメラマン、広間から出た途端、足音が消えた」
「なっ！？　じゃあ、あのカメラマン、暗示がかけられてるのか？」
「足音が消えた事実だけなら、そう考えただろうな。だが、今回の場合、あれは僕らに対する『合図』と見るべきだ」

「あ、合図って、なんの？」
『全部知ってるぞ』って合図さ。にしても、あらかじめ連中に注目しろと注意しておいた結果がそれでは、君の観察眼というのは、つくづく節穴だな！」
「はあ？　なんのことだ？」
「背丈が同じだ。それにあのやたらと大きいキャスケット帽！」
アーサーは興奮した口振りで言ったが、コナンはいよいよ混乱するばかりだった。だが、いまは彼らと接触するのが先決だ。
二人は急いで廊下の角を曲がる。
すると、曲がった廊下の先ーーその一番奥の角で、さっきの大男が一人立ち止まり、こちらを見つめていた。コナンたちと目が合うとニヤリと笑い、すぐ側の階段を駆け上って消えた。
なるほど、これだけ露骨な「誘い」なら、コナンにもわかる。ウェイトは明らかに向こうが上だが、彼もコナンたち同様、屋敷に入る際にはボディー・チェックを受けているはずだ。仮に荒事になったとしても、武器がないならどうにかなる。
「行くぞっ」
コナンが全力で駆け出し、アーサーも後に続いた。長い廊下を駆け抜けて、男が消えた階段を登る。
だが、今度は向こうも待っていなかった。構わずコナンは廊下を走り、必死に男の背中を捜した。
長い廊下を走り抜け、角を曲がり、さらに走る。
しかしーー見つからない。完全に、見失ってしまった。
「クソッ。なんだよ！　誘ってたんじゃなかったのか？」
廊下は一本道ではなかった。別の方向に逃げたのか、それとも、どこかの部屋に隠れたのだろうか。
コナンは苛立ちを吐き出して足を止めーー
気がついた。
「……え？　おい？　アーサー？」
後ろに続いていたはずのアーサーがいない。
サッと青ざめたコナンは、すぐに来た廊下を引き返す。大声でアーサーの名を呼びながら。

＊

さすがのアーサーも、「それ」を見逃さずに済んだのは、半ば偶然だった。

コナンの後を追って全力で走る中、視界の隅に映ったのだ。その瞬間、アーサーは思わず足を止めていた。

廊下に点在するドアのひとつ。その隙間から、「黒い何か」がわずかにはみ出していたのである。

それがベールだと気付いたのは、観察というより直感の賜だった。あのときーー依頼に訪れたとき、あいつが付けていたベール。ドアの前で目を見開いたアーサーは、ハッと我に返ってコナンを呼び止めようとした。

しかし、それより早くドアが開き、中から伸びた腕が、アーサーを部屋の中に引きずり込んだ。

「うわ!?」

危うく転びそうになり、蹈鞴を踏んでバランスを取り戻す。

そして、部屋の中央で背後を振り向くと、さっきのカメラマンがベールを回収しつつ、バタンとドアが閉じるところだった。

閉じたドアに背を預け、カメラマンがアーサーに向き直る。

「やあ」

と、にこやかにーー

いや、艶やかに、笑った。

アーサーは思わず全身を強張らせる。それでも、虚勢を張って笑い返して見せた。

静かに呼吸を整えながら、

「……幾つか質問があるんだが……」

「だろうね」

「最初のひとつは、性別についてだ」

「それはずいぶんストレートだな」

「初めて会ったときから骨格に違和感があった。いま『男装』しているわけじゃなく、あのとき『女装』していたという理解で合っているかな？」

「正解だ。男にしては目立つ風貌なものでね。外を出歩くときは、女性の格好をすることが多いんだ」

そう言って、カメラマンは被っていたキャスケット帽を取った。

中に収まっていた長い髪が、ばさっと肩から流れ落ちる。

「にしても、骨格か。やっぱりね。肩だろ？　ドレス姿だと骨盤はバッスルスカートで隠せるし、喉元さえ気を付ければ体格も誤魔化せるんだが、肩が難点でね。屋外ならコートで隠せるが、室内ではいかんともしがたい」

「目立つ自覚があるなら、髪ぐらいは切ったらどうだ？　おかげで、ベリル・ステイプルトンも君のことを覚えていたぞ。若く、髪の長い客人だった、と」
「ベリル・バスカヴィルの証言には、訂正が必要なようだ。こう見えて私は、かなりの年寄りでね」
「ちなみに、声は？　あのときとはずいぶん違うが」
「幾つもの声音を使い分けるのは、私の特技のひとつだよ。『私がお願いしたいのは、あの殺人鬼を捕まえることではありません』『足下がお留守のようよ？』」
アーサーは苦々しく、「なるほど」と独りごちた。
「では、二つ目の質問ーーと言うより、確認なんだが。君のことは、アイリーン・ドイルと呼んで構わない？」
「それは女性の姿のときの名だ。私には幾つも名前があってね。最近は《教授（プロフェッサー）》の通称で呼ばれることが多いが、君から教授と呼ばれるのも面映ゆい。だから、できればいまの私のことはーー
モリアーティ、と呼んでくれ」
かつての依頼主、アイリーン嬢は、そう告げた。
「モリアーティ」
と、彼の名を確かめるように、アーサーはゆっくりとつぶやいた。
二人の視線が交錯する。目に見えない力が拮抗し、ピン、と空気が張り詰める気配がした。
それから一転、アーサーは鋭く鞭を振るように、
「君の幾つもある名前の中には、《ジャック》というのも含まれるのか？」
「いや（ノー）」
「とすると、君は仮面を割った側か」
「哀れなウィリアム・クラムのことか。鋭いね。その通り（イエス）」
「半分は当てずっぽうさ。けど、おかげでだいぶ見えて来た。つまり、君はーー君たちは、《ジャック・ザ・ナイトメア》の敵対者というわけだ」
アーサーの言葉を、モリアーティは肯定も否定もしなかった。
ただ、艶やかな笑みを浮かべたまま、
「……興味深い。続けて」
「僕が関わった事件に関連する形で、『人が変わった』人物が五名いる。クロエ・ノートン。ウイリアム・クラム。ロジャー・ステイプルトン。同家のメイド。ターナ・ハドソン。この五名は何者かから催眠術を用いた暗示を受けた可能性が高いが、実は彼らの変化には、共通点がある一方、異なる点もある。変化が一時的なものか、不可逆的なものかという点だ。

ステイプルトン家のメイドと、ターナさんは元に戻った。対して、他の三名は、人格そのものが不可逆的に変化している。そして、後者の三名の内、ロジャーの『人が変わった』のは――君の訂正を反映すれば、『髪の長い男』の訪問があったあとだ。いまさら確認するまでもないが、君のことで間違いないな？」

「ああ（イエス）」

「では、ロジャーと他二名、クロエとウィリアムの変化にも、君が関わっていたと推測できる。ただし、さっきも言った通り、ステイプルトン家のメイドと、ターナさんは別（ト）だ。この二名の変化は、《ジャック》か、あるいは《ジャック》に近しい者による暗示だ」

「……理由は？」

「行方を眩ましていたロジャーが、あの晩、あの場所に現れると推理したのは、僕だ。しかし《ジャック》はー―《ジャック・ザ・ナイトメア》たち（ト ト）は、姿を見せたロジャーを的確に捕捉し、彼を殺害した。内通者がいたと見るべきだし、それがあのメイドだと考えれば筋が通る。彼女は暗示によって《ジャック》のスパイに仕立てられたわけだ。多分、ターナさんも」

「……そして私は、君に、ミス・ターナ・ハドソンの件を忠告した……」

「とすると、君は《ジャック》側ではない。そして、最初の依頼。『アイリーン』が依頼したのは、クロエの手元にある手紙の回収だ。君と手紙のやり取りがあったということは、クロエは君同様、《ジャック》側の人間ではないと推測できる。また、あのとき彼女は《ジャック》に殺害されたと報じられていた。

ここからは少し僕の想像も混じるが、君は彼女が本当に《ジャック》に殺されたんだと思ったんじゃないのか？　何しろ君は《ジャック》の敵対者だ。自分の友人が敵の標的になったと考えてもおかしくない。それで探りを入れるべく、僕のところに依頼しに来た」

違うか？　そう目で問いかけるアーサーに、モリアーティは両腕を広げて、優雅に肩を竦めて見せる。

「クロエ・ノートンは同志の一人だった」

「同志？　操り人形の間違いだろう」

「糸を繋げて糸釣り人形（マリオネット）に仕立てたと？　逆だよ。私は彼女を縛る糸を切ったんだ。私が彼女に与えたのは『真の自由』。それを得た者を、私たちは《解放者》と呼んでいる」

「ずいぶんな皮肉に聞こえるな。変化は本人の意志だと言いたいわけか？　およそ信じがたいし、検証のしようがないことだ。何しろ、当人に聞いたところで、暗示を受けていては発言に信頼性がない」

「元より、己の真実を知る者など希だよ」

「哲学的な物言いだが、それ以上に、詐欺師の口上に聞こえるね」

「良いことだ。懐疑は哲学への第一歩らしいからね」
「ドゥニ・ディドロかい？　あれは神の存在への懐疑についてだろ。やっぱり詐欺師の手管じゃーーいやいやっ。話を戻すぞ。手紙の件だ」
アーサーが両目をつり上げると、モリアーティはさも楽しげに頷く。
「彼女に渡った手紙の中には、私たちの情報が少なからず記されていてね。ところが、彼女の死が報じられたあとも、情報がもれた形跡が見当たらない。詳しく調査したいところだが、下手にこちらが動くと藪をつついて蛇を出す結果になりかねなかった。それでどうしたものかと考えていたんだが……ふと、妙案が浮かんだわけだ」
「……巷で話題の『名探偵』か」
「その通り」
「迷惑な話だ」
アーサーは苦虫を噛み潰したようにぼやいた。
しかし、
「本当に？」
こちらを見透かすような眼差しで、モリアーティが問いかけた。
アーサーは言葉を詰まらせたが、すぐに胸中の動揺を制御した。
「……君が依頼を取り下げたのは、真相に気がついたからだろ？　クロエを殺したのは《ジャック》ではないし、手紙を回収したのも、その真犯人だと。それどころか、すでに手紙を回収したあとだったのかもしれないな。ウィリアムは手紙が回収されたことに気付いていなかった。彼の元に残されていた『割れた仮面』は、おそらく《ジャック》に対するメッセージだ。彼らを装った偽物の元に現れるだろう、本物の《ジャック》への」
「結局、君の手に渡ってしまったけどね。混乱させてしまい、すまなかった」
「よく言う。誰かが手紙の回収に訪れたとき、そいつを攻撃するよう、彼に発動条件付きの暗示を掛けたはずだ」
「おや。そこは誤解だね。とはいえ、君の立場で得られる情報だと、そう推察せざるを得ないか。あれは、私たちにとっても予想外さ。ウィリアム・クラムを解き放ったのは、《解放者》クロエ・ノートンだよ。意図してかどうかは聞いてないが、彼女は私の持つ『力』に強い関心を寄せていたからね」
「……そんな嘘を吐く意味があるとも思えないし、ひとまず信じよう。つまり、手紙の回収は極めて秘密裏に、と言うよりデリケートに行われたわけだ」
「その通り。君の信用に感謝するよ」
「どうして？」

「うん？」
「わざわざ女装までして依頼しに来ておきながら、結局自分で藪をつついた理由はなんだ？」
その質問に対し、モリアーティは初めて、即答しなかった。
長くも短くもない逡巡を経たのち、
「……こちらとしても、予期せぬことがあったんでね。世の中は、玄妙だ」
「……」
モリアーティの表情からは、何も読み取ることができなかった。
アーサーは数秒間、さらに問い詰めるべきが迷った。だが、やめておいた。いま二人はフェンシングの試合のように、互いの間合いを見極めながら、言葉の剣で斬り結んでいる。迂闊に間合いを詰めれば、手痛い反撃に遭うだけだ。
「……ロジャーに仮面を渡したのも、当然君だな？　ウィリアムの件を真似て、彼も偽《ジャック》に仕立て上げるつもりだったのか？」
「仮面を欲しがったのは彼の方だよ。ロジャー・バスカヴィルの犯行は、あくまでも彼個人のものだ。そして、私たちは彼の『欲望』を尊重している」
「欲望を尊重？　どういう意味かな？」
その質問に、モリアーティは妖しい微笑を浮かべた。
切れ長の双眸が、不思議な色合いを湛える。モリアーティの気配が少し変わったことを察知し、アーサーは全身を強張らせた。
モリアーティは落ち着いた口振りで答える。
「言っただろ？　己の真実を知る者など希だ。《解放者》たちは皆、自分でも気付かない、秘めた『欲望』を抱えていた。それは『願望』と言っても良いだろう。当人の核を成す想いだ。
だが、いまや《解放者》たちはそれを自覚し、苦悩することなく、解き放っている。現在の法や社会がどのような評価を下そうと、それは人として正しい姿なのさ」
落ち着いた口振りで、モリアーティは言った。己の発言に酔う昂ぶりもなければ、盲信的な熱もない。理解を求める素振りさえ皆無だ。ただ、事実を事実として伝えるような、そんな口調だった。
アーサーはじっとモリアーティを観察する。
「……つまり、ロジャーも君たちの言う《解放者》だったわけか？　訪問した際に、スカウトしたんだな」
「彼もまた、自らの秘めた『願望』に苦しんでいたのでね。それに……彼の自動機巧人形（アウトマタ）には、個人的にも興味があった」
最後の台詞には、少し子供っぽい響きがあった。

アーサーは、ふん、と荒っぽく鼻を鳴らす。
「差し当たり、《愛猫組合》とやらの『興味』は、メリーウェザー氏だろう。彼にも暗示をかけるつもりか？　狙いはなんだ？　彼もクロエやロジャーのように《解放者》に仕立て上げるつもりか？」
アーサーは挑発的に言ったが、モリアーティは眉ひと筋動かさない。
逆に、
「昨日は忠告だった。今度は警告しておこう。
アーサー・ホームズ。
私たちや《ジャック・ザ・ナイトメア》には、『関わらない』ことだ。君だけではなく、君の周りの人たちのためにもね」
「……警告と言うよりは、脅迫に聞こえるね」
「どう受け取ってもらっても構わないよ。それからーーこれは付き合ってもらってお礼だ。君に、この世界に隠された神秘をひとつ、教示して差し上げよう」
モリアーティが浮かべていた、妖しい笑みが「深み」を増した。
無色透明な毒が、音も無く滴るような笑み。
アーサーがギクリと警戒を強める。
「来たまえ」
モリアーティは背後のドアを開けると、そのまま部屋を出た。アーサーは虚を突かれたが、すぐに慌てて後を追う。廊下に出てーー青ざめて足を止めた。
「状況は？」
「変化なし」
問いかけるモリーアティに答えたのは、追いかけていた大男だった。いつの間にか、部屋の外で待機していたらしい。モリアーティはろくに彼を見ないまま頷くと、迷いのない足取りで廊下を歩いて行く。大男はアーサーを一瞥したあと、何も言わずに彼に続いた。
「……っ！」
アーサーは固く唇を結んだが、意を決し、二人を追った。
やがて、モリアーティたちは廊下の先の回廊に出た。
最初に通された広間の二階部分だ。回廊から見下ろすと、一階に車椅子のメリーウェザーと、彼に話しかけるインタビュアーのビンセント、それに銀助とマリーの姿が見えた。二人の身の危険を感じ、「おいっ」とアーサーが声を荒らげた。
だが、モリアーティは、銀助やマリーなど見ていなかった。

「ミスター・メリーウェザー！　君に祝福を授けよう。魂の、解放を！」

まるでオペラのワンシーンのように。

モリアーティが叫び、階下のメリーウェザーが顔を上げた。

二人の視線が真っ直ぐに交わる。その瞬間、モリアーティの瞳ーー左目が、怪しい光を放った。

何かが起きた。

しかし、何が起きたのかわからない。

メリーウェザーの痩身が、車椅子の上で、大きく跳ねる。

「なっ!?　お……おお、これは！　う……ああ、あああ……！」

老人の双眸が、張り裂けそうなほど大きく見開かれる。メリーウェザーは激しく痙攣しながら、ガクガクと車椅子から立ち上がった。

「儂はなぜ、こんな……フランスとの融和など……そうだ。違う……違うぞ！　《クラブ》の思惑など知ったことではないっ。連邦制など認められるものか！　儂は……儂はもっと、この国を……いまよりもっと、精強に……！」

メリーウェザーは瞳に強烈な光を宿して、全身を引き絞るように唸った。

瞳に宿る、強烈な意志の光。だがその光は、半ば狂気に犯されているように見える。アーサーは息を呑んだ。

「ーーああ。どうやら、半世紀以上強権を振るった古強者も、時の流れには勝てなかったようだ。老いを自覚して一戦を辞した、彼の判断は正しかったんだろうね。けど、いまの彼は幸せなはずだよ。彼の、本当の想いに、忠実になれたのだから」

涼やかに、モリアーティは言った。それはまるで、天上の神々が、愚かしくも愛らしい、己の模造品を愛でるかのような口振りに聞こえた。

アーサーは回廊の手すりから身を乗り出し、

「銀助！　マリー！　メリーウェザーから離れろっ。そのインタビュアーからもだ！　他の者は二人を拘束しろ！」

大声で怒鳴ると、銀助が脱兎の如くマリーの手を引いて広間から逃げ出した。が、残っていた使用人たちは、主の急変に浮き足立っている。あの口の回るビンセントのみが、ぺろりと舌を出し、メリーウェザーから距離を取った。

「《ギアス》だ」

モリアーティが言った。「ーーな」と振り返るアーサーに、美貌の青年は、優雅に微笑みかける。

『『催眠術を用いた暗示』というのが、自説の論理性を整合する合理的な推理なのは認めよう。だが、そんなものと勘違いされたのでは、私が不本意なので訂正させてもらうよ。

これは、《ギアス》と言う。

森羅万象にアクセスする《コード》保持者がもたらした、奇跡の御業ーーなんて言い方だと、妄言に聞こえるけどね？　それでも、《嚮団》が長年秘匿し、研究を続けた、神秘の技だ。マリー・ハドソンにはくれぐれも言い含めておいてくれたまえ。安直な好奇心で記事にすることがないように」

そう言い残すと、モリアーティは踵を返し、大男を伴って回廊から廊下に戻る。

後を追おうとした。しかし、できなかった。それどころではなかった。ほとんどパニック状態だった。

いま目の前で起きた出来事が認識できない。

いま話しかけてきたモリアーティの言葉が理解できない。

アーサーは混乱していた。およそ経験したことのない、底なしの穴に落下するような混乱だ。これまで生きてきた時間と、その時間で積み上げてきた「現実」が、音を立てて崩壊していく。

しかし、

「アーサー！」

なんの神秘も謎もない。

ただ愚直に彼を案じる叫び声が、アーサーの心の軸を、ガチッと強固に固定した。

「アーサー！　無事かっ？」

「コナン！」

モリアーティたちが向かう廊下の先から、コナンが全力で駆けてきた。

逃げるモリアーティと迫るコナンが、二階の廊下で鉢合わせする。両者が互いの存在を目にし、共にその動きを止める。

そしてーー

＊

「ーーえ？」

コナンが呆然とつぶやいた。
目の前で、驚いた顔で、こちらを見やる青年。
見覚えがあった。
アイリーンだ。青年は、彼女と同じ顔をしていた。
だが、それだけではない。
青年の顔に、コナンは「見覚え」があったのだ。
アイリーンではない。彼女より、もっと前。
「ーーお前ーー」
青年の顔に動揺が走る。
そう言えば、アーサーも言っていた。初めてアイリーンがコナンたちの元を訪れた際、「完璧にコントロール」されていた彼女が、一度だけ乱れた瞬間があった、と。
それは、「最初に君を見たときだ」、と。
思い出した。
兄の死の瞬間だ。
兄が殺されたとき、この青年は、その場にいた。
覚えている。この目で見たのだから。

「《教授（プロフェッサー）》！」

大男の怒号に、自失していた青年が我に返った。わずかな舌打ちののち、大男と共に駆け出す。コナンのいる方向に向かって。廊下から逃げるつもりなのだ。
コナンはとっさに両腕を広げ、逃亡を阻止しようとした。
しかし、
「悪いがいまは、引っ込んでな」
大男の腕が伸びたーーと思った次の瞬間には、コナンの視界が一八〇度回転し、身体が宙に投げ飛ばされていた。
身体が床に叩き付けられ、衝撃に息が詰まる。アーサーの悲鳴が耳朶を打つ。大丈夫、と応えたつもりが、声は喉から出るより早く掠れて消えた。
コナンに駆け寄るアーサー。また悲鳴が聞こえる。今度は女性の悲鳴。マリーだ。メリーウェザーの怒声と使用人たちのわめき声が、階下の広間からわんわんと反響してきた。
視界が回り、歪む中、コナンは必死に身体を起こす。
目を凝らすと、廊下を走り去る青年と大男の背中が見えた。コナンは二人を追いかけようと

したが、足下が滑り、立ち上がれない。足に力が入らなかった。
声が聞こえる。落ち着け、と声は告げていた。落ち着け。落ち着いてーー
「呼吸を整えろ！　怪我はないな？　まず、マリーと銀助に合流するぞ。大丈夫だ。メリーウェザーの使用人は大勢いるっ。あの二人も、このまま逃げ切れやしない！」
それが気休めにもならない嘘だということは、聞かされているコナンも、口にするアーサー自身もわかっていたことだろう。青年と大男の二人は、このまま逃げ切るに違いない。決して捕まりやしないはずだ。だが、どうしようもない。少なくとも、いまの自分たちには。
「コナンっ。コナン・ワトソン！　気は確かか？　意識をしっかり持て！」
コナンの胸ぐらをつかんで揺さぶりながら、アーサーが真摯に怒鳴りつける。コナンは腕をもたげ、アーサーの手をがっしりとつかんだ。
「……ああ。大丈夫だ。俺は、大丈夫……」
地の足の付いた声音に、アーサーが脱力するのがわかった。コナンは廊下を振り返ったが、すでに青年たちの背中は消えていた。
階下ではまだメリーウェザーの怒鳴り声が響いている。「人が変わった」ような、狂暴な怒鳴り声。一体、何があったのだろう。誰が、何をしでかしたのか。
「……くそっ」
ひとつだけ確かなこと。
自分たちはどうやら、またしても失敗したらしい。
理解できない敗北感に塗れながら、コナンは独り、奥歯を噛み締めた。

＊

幕間

沈黙が支配するその建物の中で、彼女たち二人は無表情に、提出された報告書（レポート）に目を通していた。
やがて、
「いよいよ本格的に介入して来ましたか」
「相変わらず行動が読み切れません」
「あの子も案の定首を突っ込んでしまいましたね」
「仕方の無い子です」
「でも、彼らしい」

「はい。いじらしい」
同じ声のトーン、同じ口振りで紡がれる言葉が、室内で淡々と行き来する。
「……利用しては？」
そう問いかけたのは、男の声だ。
たちまち、
「駄目です」
「手出しは無用」
と二人の女性は返答した。
その片方が、氷の眼差しを向け、
「……まさかとは思いますが、勇み足を踏んではいないでしょうね？」
「……もちろん」
男は答えたが、その返答がどの程度信用されたかはわからなかった。男は深く頭を下げると、部屋を辞し、その場を去った。
十分に部屋から離れたのち、
「あちらこちらも、勘の良いこと。しかし……この報告は使えそうですね。私もすっかり忘れていましたが……」
そう言って、男は密かに抜き取っていた一枚の報告書（レポート）を取り出し、もう一度目を通した。
「不思議な因縁を感じます。それとも、運命でしょうか？　気になっていた疑問も解けましたし、お膳立てとしては十分でしょう」
男はそう独りごちると、手にしていたレポートを、ぐしゃりと握りつぶした。
「ここはひとつ、協力を求めてみましょうか」